
姫の守り神

ハナモト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫の守り神

【Nコード】

N4354Z

【作者名】

ハナモト

【あらすじ】

ある日の朝、カルシアが釣りに行ったら一人の女性が流されてきた。嫌々ながらも彼女を助けたカルシアは自然と彼女の大きな問題に巻き込まれていく

01 流れてきた女

いつもどおりの朝だった。

何の変哲も無い朝だったのだ。

だけれど今日は勝手が違う。

俺はいつも通り、今日の食事を取ろうと川へと向かったただけだ。

流れが少し速いものの、穏やかで大きな川。

随分と繰り返した動作で釣り糸を垂らし、すでに二時間ほどが経っていた頃。

十分に食事を釣り上げ、後一匹で終わりにしようと思っていた頃。なんで切り上げなかったのかと、後から酷い後悔に苛まれてしまった……

「……なんだ、あれ」

思わず呟いてしまう。

川の中ほどをゆらゆらと黒い物体が右から左へと流れていくのが目に入った。

汚れのまったく無い綺麗な川には似つかなく、遠くからでも酷く目立って見えた。

じつと目を細める。

あまり見たことの無いものだった。何かよく分からない。

なんだろうかと考えて、ようやく一つの答えに辿り着いた。

「……人、かな？」

木の枝か板かを抱くようにしている人に見えた。

自信は無い。

とはいえ人だとしたらさすがに放っておくわけにもいかない。少し悩んだものの、服を脱ぎ捨てて助けに行く。

川は子ども頃からの遊び場だ。泳ぐことに何の問題も無い。

勢いをつけ飛び込むと黒い物体にまで近づいていく。

流されていくその物体にすぐに追いつき、ようやくはつきりと物体の正体を見る事ができた。

それは黒い服で男装した長い黒髪を蓄えた女性だった。それも飛び切りの美人。

しかしそれを喜ぶ気にはなれない。

「やっぱり人間か……」

少々の嫌悪感を感じながらも抱え込む。女性独特の柔らかな感触が腕の中に広がった。

岸まで何の問題も無く辿り着くと、すぐに女性の呼吸を確認する。さすがに川の中でそんな確認をする余裕は無かった。

「……息があるな。気失ってから川に落ちたのかな？」

一人ごちると脱ぎ捨ててあった服を着て女性を背負う。思っていたよりも重さは無い。

釣り道具を取り、帰路に着いた。妙な拾い物をしてしまったと若干の苦々しさを感じながら。

ちよつとした森の中にある、住み慣れた小さな家に入ると女性の濡れた服を脱がせて体を拭き、自分の服を適当に見繕って着せるとベッドに寝かせておく。

すぐに家の外に出て石を組み、あらかじめ集めてあった枝を使って焚き火を作る。

人間を連れてきたこと以外はいつもの日常。

慣れきった手つきで火をつけ、釣ってきた魚の腸を小さなナイフで取ると順に焼いていく。

炎が目の前でゆらゆらと揺らめく。

魚が焼ける間に彼女の濡れた服を木の間に干し、女性の様子を少しだけ見ておくことにした。

たいして物を置いていない家に戻る。

目に付くのは壁に立てかけられた古い剣とベッドと、肘掛け椅子にいくつかの本。

その中で女性だけが異彩を放っている。異物のように思えてならなかった。

この家にあつてはならないもの。

そんな感じが胸の中を占めていた。

女性の顔を上から覗き見る。人間自体を見るのがいくらかぶり、かなり久しいことだった。

しばらく起きそうに無い。

嫌悪感以上の興味が無くなり、焚き火の元に戻る。魚は十分に焼けていた。

無造作に一つを取りほお張る。大した味も無い、食べなれた味がした。

三尾目を手に取った時、家の中の空気が動いた気がした。

手に取ったばかりの魚を戻し、意外と速かったなと思いつながら家の中に戻る。

扉を開けると予想にたがわず、女性がベッドの上で上半身を起こしていた。

「起きたんだ」

声をかけ、家にたった一つしか無い椅子を持って近づく。
女性は驚きの目をこちらに向けている。何が起こったか分からない、そんな目だった。

「……………ここは？」

「俺の家だよ」

ベッドの横に椅子を置き、そこに座る。

「川に流されてるのを見つけたんだ。何があつたか覚えてる？」

優しく聞きたかったが、どうしても声音が冷たいものになるのを自分で感じた。

人間は信用できない。

頭の片隅で常に警鐘が鳴らされているのを感じる。

女性は少し考え込む表情を見せた。

「川……………。ロー又川？」

「そういえばそんな名前だっけ。呼ぶことも無いからはっきり覚えてないけど」

「……………今日って何日？ ……ここってどの辺り？」

どうにも偉そうな態度で少しむっとする。別に感謝が欲しいわけでもないが、気に入らない女だ。

「……………臯の十日だけど。ここはロー又川の下流の近くで、クルーラ
ント側」

一瞬、適当に言ってやるつもりかと思ったものの正直に答えてやる。

「臯の十日……。まだクルーラントね」

そういつと女性は勢い良くベッドから降りた。

「そう、分かったわ。ありがとう」

「もう行くのか」

思わず顔が綻びそうになるが、必死になんとか抑える。

「ええ。急いでるから」

女性は家の扉を勢いよく開けて外に飛び出していく。

今度こそ口元に笑みが浮かぶ。自分から出て行ってくれたのだ、有難い。

ほっと一息つくくと食事を再開するべく、家の外に出る。

すると勢い良く飛び出して行ったはずの女性が、家のすぐ前で固まっていた。その視線の先には彼女の黒い服が干してあった。

どうしたのかと思いつながら後ろ手に扉を閉めると、女性がギギイという音を立てながら首をこちらに向けた。

「……あの服は何ですか？」

指を刺しながら訊いてくる。心なしか声が微妙に震えている気がした。

「あの服？」

「……あの黒い服。あなたのですか？」

どうにもよく分からないことを訊く。

「あれは君のдар。見て分かんない？ 大体、君の着てる服も俺のだし」

彼女は視線をゆっくり下げて、自分の服を見直した。
女性は完全に固まった。

「……………どうかした？ 俺の服が気に入らないなら、自分の服着て行けば？」

自分でもちよつと冷たいかなと思ってしまうような声。

親切で変えてやったのに、その態度は無いだろう。

彼女が俺を真正面から見据えるようにして、口をパクパク動かす。
声は出ていない。

「……………俺、口読めないから声出してくれる？」

彼女の口が止まり、一度大きく深呼吸する。そして意を決したような視線を向けてきた。

「……………見たの？」

「何を？」

「何をつて……………その、……………私の体」

「ああ、見たけど？ そうじゃないと着替えさせられないし」

「何考えてんの！ 気くらい使いなさいよ！」

と、耳鳴りのするような大声を発し、俺は耳を両手で塞いだ。彼女の顔は茹ダコのように真っ赤だ。

「……………うるさいなあ。そんな大声じゃなくても聞こえるよ。濡れた服のまま寝かせとくわけにもいかないだろ」

「そういう事言っでんじやないのよ！ 人の裸見といて何よ、その態度！」

さすがにむかつ腹が立つ。

「助けられといて、お前の方こそなんだよ。あのまま放っておいたらお前死んでたろうが」

「そんなの、私の裸見たのでチャラよ！ チャラ！ むしろ私の方が払いすぎたくらいじゃない！ 信じらんない！」

「ああ、そうかよ。もう何でもいいから、とつとへ行けよ」

もはや苛立ちも隠せない。隠そうという気もなくなっていた。

とにかく彼女を立ち去らせることが肝要だった。

顔を真つ赤にした彼女はすぐに立ち去るかと思っただが、真つ直ぐに魚を焼いていた焚き火へと向かった。

黙って焚き火の傍に座ると、少し焼きすぎた魚をほお張り始めた。

「おい！ それは俺のだぞ。勝手に食うな！」

「いいじゃない、こんなにあるんだし。お腹空いたから貰うわよ。

それに私の裸見たでしょ、これぐらいじゃ足りないわよ」

あまりの言い様に後ろから殴り飛ばしたくなっただが、震える手をなんとか押さえて、深呼吸する。

何とか自分を落ち着かせると彼女の前に座り、あまり食べられないうちに食事に取り掛かる。

食べ終われば出て行ってくれるのだ、それまでの我慢と思いつめた。

彼女がじつとこちらを見つめる。顔はまだ赤い。

「……そっぴやあんだの名前、聞いてなかつたわね」

「……カルシア」

「私はリーラね、よろしく」

すぐに分かれるのによろしくも無いものだと思い、俺は返事をしなかった。

「それにしてもこれ、まずいわね。食べれないほどじゃないけど」

我慢できるかどうか、自信が無くなってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4354z/>

姫の守り神

2011年12月15日00時50分発行